

# ふるさと風

第73号 (2012年6月)

風に吹かれて (52)

白井啓治

『確りと呼べば

木霊は必ずかえつてくると風のいう』

喉もと過ぎれば熱さを忘れる、とは言われるが、それにしても早過ぎるのではないか、と言いたくなる。最近多いのではないだろうか。

限りなくクロに近いグレーであるが疑わしきは罰せず。救われた者が大手を振って正義を語ってみせる。絶体絶命の電力不足の検証もいまま、悪魔の火をともしようとしている。挙げていけばきりの無いほどであるが、誰もが「まあ、なんとかなるだろう」の顔して問題や課題に対峙しようとしていない。

「それっておかしいだろう！」

そう確り、ハッキリと声すれば必ず問題解決の糸口になる答えが木霊になって帰ってくるものなのだが・・・。

消費税を上げる前にやる事があるだろう、と言うのではなく、「消費税を上げる前に〇〇をこうして、××をこうする。そのうえで・・・」と何故言わぬ。正論には違いないが、具体策の提示しない正論からは何も生まれない。結局は我欲だけが目立ち、無策無能と断ぜられても仕方ない話ば

かりである。所詮は自分が責任を負わないで済ます魂胆と言われても仕方がないだろう。

この会報「ふるさと風」も今日からいよいよ7年目に突入である。この7年目を確りと越すことが出来れば、10年は今までの流れの力でたどり着くことが出来るだろうと思う。

私はへそ曲がりな所為もあるが、他人から良い人だとか、物わがりのいい人と言われることが好きではない。なんにでも突つかかる嫌な奴だと言われることの方が何ぼか好きである。人と違うからこそ自分自身が存在する意味なのである。と思っている。横並び、平均点が大嫌いでもある。

だが人の意見を聞く事は拒むことをしない。自分と違う意見は大歓迎であるし、そこには新しい発想を生むヒントが潜んでいるからである。しかし、いくら反対の話であっても自分の意の無い、見識のない話はノー・サンキューである。

私には既成を事実とする感覚はない。既成を破壊してみるとそこには事実とは違う真実が現れるものである。既成は一つの事実ではあるが、未来を・夢を紡ぐための真実ではない。既成を事実として振り回す輩は大嫌いである。

怒りをもって振り返れではないが、現状に対する怒りの言葉を確りと口にすることが大事である。現状に対する批判や怒りの声を確りと発せられな

## ふるさと風の文庫新刊案内

◎ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の作品が全集となりました。今回は第1～6巻が発売されました。(各巻1200円)  
(歴史の里石岡とは言われながら、多くの歴史・文化が忘れさられていく中で、伝え残していかなければならない歴史・文化を、独自の打田史学の目をもって改めて見つめなおした作品集です)

◎兼平ちえこのふるさと散歩「歴史の里いしおかめぐり」(1200円)  
(ふるさと石岡の絵散歩文庫。東日本大震災の被害に合う前の、貴重な石岡の史跡の絵が満載です)

※ギター文化館および街角情報センターにて発売しております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

ければ明日の希望は無くなってしまう。木霊は確りとした声を投げかけないと応えてはくれない。私はこんな風に考えている。負け犬の遠吠えだつて吠えないよりは良い、と。何があっても吠えないでニタニタしている奴は姑息な金の亡者だ。「過激」大いに結構。特に表現文は過激でなければならぬ。衣をつけたり、オブラートに包んではいけない。過激に10年間を迎えたいものである。

暴走する文明に、今、歯止めをかけなければ、後の世の子孫に、あの時代の祖先は、一体何をしていたのか：と恨まれますぞ！ 今こそ、英断を持って文明進化のスピードに、ブレーキをかけるべきだと先月号で吠えまくった。

産業革命以降、特に20世紀後半から21世紀にかけて、機械文明が急速に発展すると、人間の心に『ゆとり』というか、『優雅さ』というか、他人（万物）を思いやる優しさ：というようなものが、甚だしく薄くなった。世界中が、経済発展競争の呪縛に陥り、ギスギスし過ぎ。過労死や過労自殺が、こんなに頻発するようでは、何が先進国か。何が経済大国か。狂気の至りだ。

ゆとりを生むための機械化が、かえって、緊迫感を増し、汲汲セカセカ。そして、母なる地球をボクボクに傷つけ、再生不可能に近い場所も多数。何かまるで、魔物に取りつかれているみたいに、心臓破りの丘を駆け上る。休息やリラクソスの暇もない。

まず今の自分が生き抜くのに精一杯。皆が平等に、平和や安息を享受する雰囲気は、非常に薄く人の事など構っちゃられない：喰うか食われるかの心境で、社会全体が弱肉強食そのもの。グローバリズムとか恰好いいこと言たって、所詮は競争原理が先にたち、力のない者は見捨てられる。民の安寧を願って、極楽浄土を夢見た「平泉」の優雅さなど、今の世には、そのかけらも見られない。

特に私が許せないのは、文明の発展で、環境破壊が進み、人類の勝手な思い上がりから、他の動

植物を、根絶やしにするまで乱獲し、種を絶やしてしまった歴史的事実。極悪犯罪だ。この地球上に一種の生物として、幾多の災難をくぐりぬけ、今日まで生き抜いた例えば「トキ（朱鷺）」という種を、日本では近年根絶やしにしてしまった。ニホンオオカミ・エゾオオカミも、愚かな明治政府は懸賞金を出して、絶滅に追い遣った。狼は農耕民族の日本人にとって、田畑を荒らす草食動物（兎・鹿・猪等）を退治してくれる貴重な存在。狼を守り本尊とする神社は全国に<sup>17</sup>もある。それをイソップ物語で狼は悪党だとするヨーロッパの文化を直輸入して、狼を敵視した明治政府の愚かさ。人間も単なる自然の一部。人間に他の種を絶滅させる何の権利があるというのか？ 思い上がりも甚だしい。これは、日本人だけが愚かなのではなく、全世界ありとあらゆるところで、普通に見られた「愚行」の積み重ねであった。北アメリカの「旅行バト」や、マダガスカルの「ドウドウ」など、人間という野獣が全部喰い尽し、絶滅させてしまった。そして更に、我々の子孫にもその恩恵を享受する権利のある天然資源を、枯渇寸前まで掘り尽くしてしまった。

文明が進めば、より一層、心豊かな、慈愛に満ちた世の中に進化すると思うのは、誰しも思うところ。それがまるで逆方向に突進している。

世情の方向性を、何か大きなもの・イスラム教の大統領より偉い『最高指導者』のような者が現れて、人類の進む方向性を、大きく舵を切り直す操舵手がないものか。物欲の奴隷。守銭奴。押金の亡者共。こんな怪物が跳梁跋扈。こんな人類の方向性を見過ごせば、現代に生きる我々は、子孫に顔向けが出来ない。今この世に生きる全人類

の責任において、人間の進む方向性を、もっと博愛に満ちた慈愛の心で、全ての生物に対し相手を人間と同格の権利を持った生き物として、尊重する立場を鮮明に表わしていかなければならない。それができなければ、人類は自らを「万物の霊長」と奢るなど、チャンチャラおかしい話である。

もし、現代人が反省を忘れ、利根的に今を楽しめばそれでよしとする風習が激化し、環境の悪化が急速に進めば、そんなに遠くない将来、大きな破滅が忍び寄ってくる。温室効果ガスで、中緯度地帯が熱帯化すれば、低地が水浸しどころではない。マラリアをはじめとする多くの熱帯病が蔓延する。現在世界中で二億人がマラリアに感染し、毎年二百万人が死亡しているが、全く耐性のない中緯度地帯の人間にマラリアがはびこれば、猛烈な勢いで死者が出る。

【私は、マラリアが猛威を奮う熱帯(中米)で、国際協力事業として、獣医の仕事をしてきた。マラリアには病原体により3日熱、4日熱、卵形、熱帯熱の4種があり、赤血球を破壊し高熱を出す。その中で熱帯熱マラリアは最も悪性で、原虫が脳の血流を止めるため、患者は昏睡・意識障害を起こし、死に至る。治療薬は1638年に発見されたキニーネ。予防的に毎日飲んでいれば、たとえ感染しても病原体の増殖が阻止されるため、発病はしない。中米の現地で、日本人<sup>12</sup>人のプロジェクト中、私はただ一人マラリアに感染しなかった。古典落語『蚊帳いらず』にある通り、こんなバカを刺したらオレまでバカが感染してしまうと「蚊」が私を敬遠したせいか、私だけが陰性であった。その理由は、JICAから出発時、マラリア感染防止のため①毎日欠かさずキニーネ剤を飲む②熱

帯の炎天下でも決して素肌を出さない③酒など飲んで夜の街をふらつかない：の3原則を守るようきつく言われていた。しかし、バカ真面目にそれを守り通したのは私だけであった。具合が悪いわけでもないのに、毎日薬を飲み続けるのは、真に苦痛。熱帯で半袖・半ズボンが禁止など、とても守れるものではない。ラテンアメリカの夜は、実に魅惑的。誘惑には強い意志がなければ負けてしまう。それらをすべて守り通したのだから、自分で言うのも変だが、私の「真面目」の枕詞には「馬」と「鹿」の字が付きまとう。

マラリアには、医学の進んだ今日でも、未だにワクチンは創られていない。敵は人間の攻撃に対し、スルリと変身し、耐性を獲得する。媒介するハマダラ蚊も殺虫剤耐性で、お手上げ状態。】

\* \* \* \* \*

産業拡大などによる環境破壊は、ほんのわずかの理性を働かせば、修正できるものを、目の前の小利に目がくらみ、放置される。こんな見え見えの近未来を無視して、享楽主義に溺れていけば、人類の滅亡もそんなに遠い話ではなくなる。アメリカの温暖化ガス抑制政策を無視した浪費主義や、中国の先進国に追いつくための、環境を破壊し、無謀極まりない近代化政策は、人類滅亡につながる見本みたいなもの。先を見通す知性の欠如とも言える。これらを見過ごせば、未来の子孫達に、あの時代の祖先達が愚かだった「つけ」が、今、我々を苦しめている…と罵られること必定。

『人とは、過去と未来を考えることのできる唯一の動物である』と言われるが、目の前に迫った温暖化による弊害が見え見えなのに、それを防ぐ手段を講じないとすれば、人間ほど愚かな動物は

いないということになる。殆ど無制限に近い状態で、危険なオモチャを大量生産し、アクセルをいっぱい踏み込んで、ブレーキをかける機能は忘れがち。これでは世界のいたるところ事故だらけ。便利なものほどすぐ壊れる。スピードのあるものほど、すぐには止まらない。今の今オレさえ儲ければそれでよいとする現代の社会システム。金融界を操作する「物の怪」ども。経済市場に暗躍する化け物達。拝金主義者共は、地球の明日など考えていない。『今の今、オレだけが…』で一杯だ。これではホモ・サピエンス(智慧ある人)の名を返上するしかない。

\* \* \* \* \*

こう考えてみると、結局人間とは「地球に寄生する極悪非道の剛の虫」ということになりやしませんか? ということになる。

生き物を、DNAという分子により支配される「物質の塊」という見方をすると、バクテリアも雑草も虫けらも、そして人間も、1個の細胞を生存在基本単位とする共通性で貫かれており、特別の優劣などあるわけではなく、基本的には何ら変わりはない(40億年前、膜で囲まれ、新陳代謝をするタンパク質などのかたまり細胞。このただ1個の細胞が、全ての生物の祖先。人間が万物の霊長などと奢り高ぶって見たところで、チンパンジーとDNAは1%ぐらいしか変わらない。まかり間違えば、豚の方が知的に発達し、人間という動物を肥育し、食用家畜として、飼育していたかも知れない。犬という主に、人間という家来が尻尾を振っていたかも知れない。

それ故、人間が大層ぶって、母なるこの地球をほじくり返したり、大気の成分を勝手に変えてし

まったりして、多くの生物が生存する環境を破壊するなど、もつてのほかである。これまでに人間の勝手で、地球上から抹殺された生物種が数えきれないほどある事実を、到底私は容認できない。

\* \* \* \* \*

最近入手した情報で、驚くべき人間の愚行例は、『そこまでやるの?』…と、驚かされる。それは、北朝鮮やイランの常軌を逸した行動に対する米軍の対応策の話である。米軍は、大量破壊兵器の保有国が、地下深く核施設などを掩蔽壕(えんぺいごう)に隠していると睨み、これを爆撃機に「地下貫通爆弾」(バンカーバスター)を搭載し、ピンポイント爆撃する検討がなされているという。このバンカーバスターは、厚さ60センチのコンクリートの壁を貫通できるが、近年コンクリートも、金属繊維などと混ぜ合わせて作られ、鉄筋コンクリートよりも遙かに強固だという。フランスで開発され、日本でも橋梁建設などに使われている。この爆弾は長さ6メートルほどで、重爆撃機で運搬でき、一発13億円もするのに、米軍は、20発も持っているが、強化コンクリートの開発により、殆ど役立たずとみられているとの話。そこで更にそれを上回る高性能爆弾を制作するため、巨費を投じて研究開発に乗り出したという。正に抗生物質開発とバクテリアの耐性獲得のイタチごっこと同じ。或いは「矛」と「盾」との関係と同じである。

地球に寄生する人間という強情な虫。どこまで地球環境を破壊すれば満足することやら。地下に街を作り、鉄道や道路が、普通の地下どころか、海底までもほじくり返し、モグラ路を増やし続ける。山を削り木を倒し、自然を破壊する。熱帯雨林を畑地にし、バイオ燃料を生産する。化石燃料

が枯渇しそうになると、海底のメタンハイドレート  
の発掘に目を付ける。中国は北極海の沿岸国で  
もないくせに、北極海の海底に、中国国旗を立て、  
将来の発掘権を主張する。最近の「嫦娥2号」打  
ち上げの狙いは、月面探査権の主張と言われる。

人間の住処（すみか）は、自分の背丈に、少し  
余裕を持たせれば十分であろうに、豪華な宮殿と  
やらを作り上げる。いずこの国の大王も同じこと  
を繰り返した。人間の欲望の深さというか、自己  
顕示欲の強さというか、庶民を苦しめて、己の偉  
大さを表現しようとする。この傾向は古今東西、  
一貫して変わらない。人類は地球という宿に間借  
りしている旅人にすぎない。『剛』の虫に歯止めを  
かける知性は、今を生きる人類に課せられた、喫  
緊の課題である。

\* \* \* \* \*

さて話は変わるが、今年サンフランシスコ講  
和条約の発効から丁度60周年。主権を回復して  
60年の節目の時を迎えたというが、国民は権利ば  
かり主張して義務を果たさない例が多々見られる。  
あるいは自由を履き違え、自分勝手に自由主義だ  
とする愚かな風潮など、全く大人になっていない。  
60歳は立派な大人だと思うが、やることなすこと  
すべてガキみたい。

地方自治体や国が、国家の一大事で、何かを強  
行決定せざるを得ない時、個人の権利が先行し、  
何事も大きなプロジェクトなど推進できない。

個人の権利を踏みにじっても、国家の方針が優  
先する体制は、戦前の日本が、いやというほど経  
験済みである。あんなことを二度と繰り返しては  
いけないことは絶対だ。しかし、卑近な例だが、  
一定の道幅で、道路整備がなされ、地域住民も大

変安全で便利になって喜んでいるのに、どこか一  
か所だけ道幅が普通通りの狭いまま。歩道も途切れ、  
歩行者も危険な状態の所が時々見られる。どこの  
誰が、どんなにお願いしても、地主はガンとして  
協力を拒否し、土地を売らない。それまでの経緯  
（いきさつ）がどうであったか知らないが、人間あ  
る時点で妥協するのも、人の道というものである  
う。成田空港闘争はその典型だ。

今回、東日本大震災をうけ、復興に当たり、既  
存の鉄道や道路の路線変更など、ありうる話だ。  
役場・学校・病院・公民館などの移築の話も多数  
あるようだ。或いは、漁港や付帯設備は当然岸壁  
に沿って復旧しなければならぬだろうが、従業  
員の住宅は、高台に移築の話は当然であろう。そ  
して、岸壁の施設から、津波の際など、緊急に従  
業員を高台へ避難させるための幅広い最短距離の  
道路整備は絶対必要条件であろう。まさかこんな  
場合は、頑固一徹、土地を譲らない等の話はない  
と思うが、（憲法記念日にこの原稿を書いている）憲法改正  
の議論が多数ある中で、国民の生命と財産を守る  
ためには、時により、財産権の基本的人権を必要  
最小限度で、一時的に制限することも可能なよう  
に、はつきり憲法を改正しておく必要があるのだ  
はなかるうか。土地収用法はあるが、内乱勃発・  
他国の侵略・強大な自然災害発生時などのため、  
国家権力で対応できるよう、整備しておく必要が  
あると思う。今の日本で、内乱など起こるわけは  
ないだろう、他国が攻めてきてもアメリカが守っ  
てくれる。自然災害は慣れっこになっているので、  
国家統制など必要ない……などの考えは甘すぎる。  
貧富の差が拡大すれば、いつ内乱が起きても不  
思議はない。アメリカが、どこまで守ってくれるか

分らない。武器が進化した今日、他国の応援隊  
が来る前に、首都が焦土と化す可能性は十分にあ  
りうる。自然災害も、強大地震に火山噴火の連発  
とか、スーパーブルーム（マグマの同時多発噴出など、  
もし発生があれば、日頃からの国家危機対策の準  
備がないことには、ただただ右往左往するだけで  
あろう。それゆえ、あらゆる想定外も計算に入れ、  
その準備が必要である。個人の権利の擁護もい  
けれど、大衆が危機に瀕したとき、個人の利益を  
超えて、国民を守る体制の整備が日頃から必要と  
思う。

余力があっても学校の給食費を払わない。公共  
料金の納付を渋る。医療費を払わない。働けるの  
に生活保護費を受けっぱなし（2011年度末、生活保  
護受給者は、日本で209万人。50人に一人の割合。その費用  
3兆円）。数え上げたらキリがない。金を出すのは  
いやだ。しかし福祉その他の恩恵は、たつぷり受  
けたい：では筋が通らない。

地球が収容できる人口には限度がある。増え過  
ぎたために、自分の種族だけが生き残ろうとして  
競争が生まれる。会社や国家がその縄張りを広げ  
ようとして、なりふり構わず、猛進してきた。そ  
のため、他の動植物を絶滅に追い遣ったり、資源  
を枯渇させたり、挙句の果てには、我々の子孫が  
安全に暮らせる環境を破壊してしまった。

近年人類は、母なる地球をさんざん傷つけ、再生  
不可能に近いまでに痛め尽くしてきた。子孫から  
恨まれないためにも、猛省が必要である。とにか  
く母なる地球を傷だらけにする剛の虫。こんな寄  
生虫の「虫下し」を急いで創る必要がある。

## 行方

ナメカタ⇨冷泉のほとり

## 所在・語源

『常陸国風土記 行方郡』には、「古老のいへらく、一、行方(ナメカタ)の郡(コホリ)と称(イ)ふ所以(ユエ)は、一、『※ヤマトタケルが』郷体(クニモト。頭注⇨土地の形状)甚愛(イトメツ)らし。宜(ウベ)、此の地(クニ)の名を行細(ナメクハシ)の国(頭注⇨ならべくわしき国。山海の自然の並べ方(地形、景色)が精妙に優れている国の意)と称(イ)ふべし』とのりたまひき。後の世、跡を追ひて、猶(ナホ)、行方(ナメカタ)と号(ナツ)づく。風俗(タニブリ)の諺(コトワザ)に、立雨零(タチサメコリ)、行方(ナメカタ)の国(イ)あるいは、「ヤマトタケルが 槻野の清泉(シミツ)に頓幸(イデマ)し、水に臨みてみ手を洗ひ、玉もちて井を采(サキ)へたまひき。今も行方(ナメカタ)の里の中に在りて、玉の清水と謂(イ)ふ」などと書かれていた。地名は、まず、そこに生活している人たちの必要から名付けられる。したがって、同じ名称の広域地名と局所地名がある場合、後者の方が時代的に先行する。最初に集落が形成されたところなどにつけられた小地名が、やがてそこが地域の中心になるに及んで、地域全体に拡大適用されていくことが多かったことが想像される。行方の国、のちに郡、のなかに行方の里があった。国、郡はヤマトの統一中央政権が確立したからの名称であり、そのはるか以前から土地の人の狭い生活圏のなかにナメカタがあった。では、なぜそこにナメカタという名をつけたか。ヤマトタケルが手を洗った清泉が「今も行方の里の中に在りて、玉の清水と謂ふ」というのが作り話であ

ることは言うまでもないが、その清泉が住民にとって貴重なものであったことは、彼を当事者にしたことから推測できる。その清泉は縄文語で【nam 冷たくある】【mem 泉池、池、湧きこぼ】<sup>【馬里】</sup>の項。それは「今も行方の里の中に在る」というのであるから、そこは、【nam 冷たくある】【mem 泉池、池、湧きこぼ】【ka 上、岸、ほとり】【ta そのところ】となる。のちにそこに郡役所を置いて行方郡が設置された。郡役所は単に郡(コホリ)とも呼ばれた。その「郡の東に国つ社(頭注⇨被征服者の土着神をまつる社)あり。一、社の中に寒泉(シミツ)あり。一、郡に縁(ヨ)れる(頭注⇨郡衙(郡役所)の近くに住んでいる)男女、会集(ツド)ひて汲み飲めり。」(同。それは、縄文系在住民が祀る社である。しかも、その中にあるという「寒泉」はまさに【nam 冷たくある】【mem 泉池、池、湧きこぼ】の直訳である。今、行方郡は行方市となり、その旧麻生町に大字行方がある。その小字に、この「社中に寒泉あり」の国神。池の上、池の方等池の付く小字名が6カ所ある。そのうちの「池の上」は【nam 冷たくある】【mem 泉池、湧きこぼ】【ka 上、岸、ほとり】【ta そのところ】の直訳で、そのkataの発音をそのまま使ったのが「池の方(カタ)」である。隣の旧玉造町にある大字井上も、また、【nam 冷たくある】【mem 泉池、湧きこぼ】【ka 上、岸、ほとり】【ta そのところ】の直訳だ。「是郷(コノサト)ハ旧行方郷ノ内ナルヲ、和銅以後に分置セラレシナリ」(『新編常陸国誌』1830頃)とあるように、もとは行方の里にあった。「風俗(タニブリ)の諺(コトワザ)に、立雨零(タチサメコリ)、行方(ナメカタ)の国といふ。」(同)とも書かれていた。これを頭注では、「立

雨は俄かに降ってくる雨。その雨脚が同じ方向にならんでいる意でナメ(並)とかかり、ナメカタの地名に冠する称辞としたもの。」としている。しかし、「風俗(タニブリ)の諺」⇨頭注「土地の人が言い伝えて来た詞、または言ならわし」に、そのような文人趣味があるとは思えない。では、「立雨」と「行方」とはどこで結びつくのか。立雨の立は夕立の立で、雹も降ることがあるような夏の冷たいにわか雨のことである。それは「土地の人」⇨縄文系在住民の言葉で言えば、【nam 冷たくある】【mem 泉池、池、湧きこぼ】【ka 上、岸、ほとり】【ta そのところ】⇨ナメカタに掛けたと考えられる。最後に読み方であるが、『和名抄』の郡名にも「行方 奈女加多」とあるように、「行」にナメという読み方を当てている。漢字の「行」には並べるといふ意味があり、それは古語で並(ナ)メと言ったことによるのであろう。

『常陸国風土記 行方郡』に、行方市富田の小字霞近辺に比定されている「香澄の里」の記事があった。「霞の郷」とも書かれ、霞が空にたなびいたことに由来するといふ。しかし、「此の里より西の海の中に洲あり。」とも書かれている。アイヌ語縄文語によれば、【kasu (川を) 渡渉する⇨kasu 上、他動詞を作る語尾】【muy 浦、入江、入海⇨moy】カシミ。近くに洲があるそこには、この語源があるはまりそうである。対岸にも妙岐ノ鼻と呼ばれる洲崎がある。

【語】 nammemkata→nammekata/kasumuy  
→kasumi

## 茨城

ハラキ＝広くしたところ

### 語源所在

国郡制施行によって常陸国茨城郡とな

る前の郡は国と呼ばれ、『古事記』に「茨木国」、

『日本書紀』・『常陸国風土記』に「茨城国」とあ

った。行方もそうであったが、この地も久しく縄

文人の楽園であった。そこへ、渡来系支配層が、

水田稲作適地を拡大するために侵攻してきた。建

借間命(タケカシマノミコト)、騎士(ウマイクサ)をして

堡(ヲキ)を閉(ト)ぢしめ、後(ウシロ)より襲(オン)

ひ撃(ウ)ちて、尽(モトモ)に種属(ヤカラ)を囚(ト)

らへ、一時(モロトモ)に焚(ヤ)き滅(ホロボ)しき。」

『常陸国風土記行方郡』。「黒坂命、一茨棘(ウバラ)

を穴の内(ウチ)に施(イ)れ、即(ヤガ)て騎(ウマノ)

りの兵(ツハモノ)を縦(ハナ)ちて、急(ニハカ)に

逐(オ)ひ迫(セ)めしめき。佐伯等(サヘキドモ。縄文

系在住民たち)、一尽(コトゴト)に茨棘に繫(カカ)

りて、衝(ツ)き害疾(ソコナ)はれて死に散(アラ)

けき。故(カレ)、茨棘を取りて、県(アガタ)の名に

着(キ)き。」(同『茨城郡』。「賊(アタ)を規(ハカ)り滅

(ホロボ)さむと、茨(ウバラ)をもちて、城(キ)を

造りき、此の所以(ユエ)に、地(クニ)の名を便(ス

ナ)ち茨城と謂(イ)ふ。」(同。行方でも茨城でも、

マツロハヌモノ(服従を拒否するもの)は皆殺し、服従

したものはオホミタカラと称して稲作労働を強制

した。

『古事記』に「茨木国」、『日本書紀』等に「茨

城国」とあるのは、どちらも当て字であることを

示す。『常陸国風土記』では茨城の地名起源につい

て右の二つの説話を載せた。前者は茨木の由来を、

後者は茨城の起源を説いていたものであるが、当

て字をあれこれ解釈しても始まらない。新井白石

の言葉(前身)を引用するまでもなく、地名の語源を追究するには、文字でなく辞(コトバ)によらなければならぬ。では、茨城をどう読んだか。どのような言葉に茨城をあてたか。それを教えてくれるのは、時代がやや下がるが、唯一、『和名抄』(934)だけである。そこには、国名に「常陸国国府在茨城郡」、郡名に「茨城牟波良岐(※ムハラキ)」、郷名に「茨城郡茨城」「那珂郡茨城」などと記されている。だが、すべての学者たちはこの貴重なキーワードのムハラキに出会い、言葉を失い立ちすくんでしまっている。「国府在茨城郡」の茨城(ムハラキ)郡は今、石岡市石岡の小字茨城(バラキ)として残っているが、まず、このムハラキとバラキのつながりを解明する。

『和名抄』には美作国大庭郡を於保無波、上総国海上郡稲庭郷を伊奈無波と、オオバ、イナバのバの読みを無波で表記する。牟波良岐にもそれを適用すれば、茨城はバラキである。同書ではム・ンに無・牟・无を当てていた。アイヌ語に濁音がないように、縄文系の人たちは、とくに有声破裂音b・d・gの発音が苦手だったらしい。その発声を楽にするために、サラム(ム)バ・クン(ム)ギ・マン(ム)ドなど、直前にヨ/ロという通鼻音を先行させた。それを渡来系が忠実に表記したのが、この無波・牟波ではなからうか。したがって、mbarakiはもとmbarakiであった。『和名抄』は平安時代の著書であるが、さらに遡れば、濁音それ自体もなかったものと思われる。したがって、バラキは、バラキであった。そのバラキの語源はと言えば、縄文語で【para広くある】【ke自動詞に着いて他動詞を作る】【iこと、ところ】＝広くする／したこと／ところ＝開墾・開墾地である。こ

れは、渡来系に屈し、水田開墾を強制されたオホミタカラ自身の言葉であろう。それに当てた漢字が茨(ウバラ・ウマラ、後にバラ・イバラ)城/木ということか。ちなみに、【para広くある】の語源は、pa 頭崎、ふち、川下/ra 低い所＝沖積平野であろう。parakeiは、そのまま「開、此れをは、波羅企(ハラキ)と云ふ」(『日本書紀(継体)』と、普通名詞にもなった。開(ハラキ)すなわち、開き＝広くすること＝開墾・開拓・開発である。原、腹?、墾る、広し等も同系列の派生語である。「那珂郡茨城」「茨城郡茨城」と同名の郷があったが、伊豆国田方郡茨城郷、下総国匝瑳郡茨城郷もあった。前記メナのように、同名の小地名はいくつあってもよい。

転音 parakei→paraki→baraki→haraki

## 鹿島

シカシマ神＝大いなる天上の神

### 語源

『常陸国風土記 香島郡』によれば、「其処に有

(イ)ませる、一香島の天の大神」の名を採って香

島郡を建てたという。649年のことであった。

そのことよって、「香島の天の大神」はそれ以前

から「其処に有ま」したことがわかる。しかし、

「淡海の天津の朝(661-670)、初めて使人を遣

はして、神の宮を造らしめき。」(同)とあるように、

それまでは神殿もなかった。また、祭神名につい

ては、「経津主神(フツヌシノカミ)是、磐鬘女神の子、今、

下総国の香取神、是なり。」・武甕槌神(タケミカツチノカミ

是、甕速日神の子。今、常陸国の鹿嶋神、是なり。)(『古語拾

遺』807)をもつて初見とするので、その近くま

では祭神もなかったことになる。しかも、『常陸国

風土記 香島郡』は、天地・海陸が分かれず、混沌

としていたところ、天孫降臨に先立ち高天原から豊

葦原の地に降り着いたのが「香島の天の大神」だと続ける。渡来系支配層が進入する以前からの在地の神ということだ。さらに、『同書 信太郎』には、「榎(エ)の浦の津あり。・常陸路(ヒタチチ)の頭(ハジメ)なり。・伝使等(ハヌマツカヒラ、初めて国に臨(イ)らむには、先ず口と手とを洗ひ、東に面(ム)きて香島の大神を拝(オロガ)みて、然(シカ)して後に入(イ)ることを得るなり。」とある。これは昔の話ではない。『風土記』を編述している時点での情報だ。そのころは常陸が渡来系支配層の領地になって久しい。にもかかわらず、中央政府の官人でさえ、「香島の大神」に向かつてうやうやしく拝礼しなければ、自分たちの出先の領地に入れないという。祭神名も神殿もなく、それでいて神威が非常に高く、はるか昔から「其処に有ませる」「香島の大神」は縄文時代からの神であった。それならその語源はアイヌ語(縄文語)解くことが出来るはずである。

カシマは、『常陸国風土記』以前の『日本書紀』の「大鹿嶋」や『万葉集』、あるいは、以後の『続日本紀』、『和名抄』その他では、すべて、「鹿嶋」と書かれているのに、『常陸国風土記』では、すべてが「香島」である。それは、『風土記撰上令』(713)の地名好字化によるものであろう。しかも、風土記以外は先にも後にも「鹿嶋」であったことは、地元鹿への深いこだわりがあったことを示しているといえるのではなからうか。もしかしたら、鹿嶋はカシマではなくシカシマでなかったか。というのも、チューネル・M・タクサミ、ワレリー・D・コーサレフ共著『アイヌ民族の歴史と文化 北方少数民族の視座より』(明石書店)には、からずも、「シカシマカムイ」という文字を見出し

たからである。同書は、ネフスキー・N・Aの『アイヌスキーフォルクロール』から次の文を引用している。「シカシマカムイ」の「シカシマ」という語も女性の神格と関連するかもしれない。この語の「シ」(真の、強い、神秘的な力を持つ)と「カシ」(上上の、何か上にある)と「マ」(女から成ると考えられるからだ。とすると「高みにいる真の女性」言うなれば(※カムイが後続して)「高みから見ている」女神ということになる。同書はまた、ドブロットヴォルスキーなどがシカシマカムイを守護神、守護者、管理者などと訳していることや、バチエラーがカムイを、「カ」(上)、 「ム」(広がっている)、「イ」(名詞化の小詞) — 「我々の上に広がっているもの」と分解していることを紹介している。

このアイヌ語のシカシマカムイを、もう一度整理するとつぎのようになる。【*si* 真の、本当の、大きな】**[kasi** その上面の**】** **[mat** 女**】** **[kamyu** 神**】**。

カムイは **[kamu** かぶさる、覆う**】** **[i** もの**】**、あるいは、**[ka** 上面**】** **[mu** ふさがっている**】** **[i** もの**】**、**mat** は語尾消去母音化、**mat**。これらから、シカシマカムイは、大いなる我らのその上の女の神。天上に君臨する偉大な女神。大いなる天の女神となる。『風土記香島郡』にしきりに見える「天の大神」は、シカシマカムイのこの訳語から、女を省略したものであったわけだ。なお、バチエラーはシカシマを支配するとし、知里真志保はシカシマカムイを守り神とする。そのシカシマに漢字をあてると鹿嶋、それはカシマとも読むし、シカシマのシ(大いなる)を省略してもカシマである。上記『書紀』の「大鹿嶋」も、シカシマの直訳と見ることが出来る。

それに対して、上記「下総国の香取神」(千葉県側

の香取神宮)は **[kanto** 天。 **[kan** 上方にある。 **[o** 海。 **[si** 海は水平線。天に続くと考えられていた**】** **[i** 高くある**】** **[kamyu** 神**】** 天上の神と理解できる。各地に香取神社にちなむ香取地名があるが、石岡市小幡・須釜・柿岡の小字カンドリ、行方市若海の小字カンドリ、石岡市茨城の神社跡の通称のカンドリなど、ほぼ原語どおりに発音するところもある。

↳ **[sik** **[asimat** → **[sik** **[asimat** → (鹿(シカ↓カ))  
↳ **[sik** **[asima** / **[kantor** → **[kandori** → **[kantor**

## 2012 CONCERT SERIES

ギター文化館は今年で20周年を迎えます。  
魅力あふれるコンサート企画で皆様をお待ちいたしております。  
どうぞよろしくお願ひいたします。

- 7月 1日 高橋竹童【Trinity】津軽三味線コンサート
- 7月15日 ホルヘ・ルイス・サモラ
- 9月 9日 里山と風の音コンサート
- 9月30日 高野行進 jazz live

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間431-35  
Tel0299-46-2457 Fax0299-46-2628

七、八年前、堤防を歩いてた夕方のことだった。七色に染まる天上と水面の美しさに見とれていた時、話しかけてきた人がいた。霞ヶ浦の話から玉里御留川の話になって、「御留川という制度の陰には、より金を吸い上げる為に女郎屋を制度として作った筈ですよ。聞いたことありませんか。この辺にはありませんか」と聞かれた。突然のことです。「そうですね」と答えにならぬま別れた。そういう場所は自然発生的に出来たものだと思っていたので即答出来なかつたあの日の事がずっと気になっていた。迫めて今迄耳にした様な話しを綴ってみよう。

御留川漁場の中にも様々な事があつたらう。男達がいて女がいた。労働が苦しい時程、稼いだ金は楽しいことに使つたらうか。この流れを行き交つた舟は数知れない数だ。男達の腕と体は自然との闘い其の物だつたと思う。三寸下は水、死と背中合わせだ。荒くれ男達とはいえ、何十日も掛けて流れとの闘いの中ではうっ憤も溜り、喧嘩も起き、憂さ晴らしもしたことだらう。現に小川河岸の藩のお船頭達は、藩の力を笠にして漁師達の網を外したり、切つたりした事があつて訴状を起されたことがある。そんな文章もあつた。戻つて来る時は、彼方此方の品々を仕入れて意気揚々と舟を降りて来たことだらう。河岸は人の出入りが多く、品物の流通が盛んで仕事も多かつたらうが、病気を背負い込んできたり不幸を播き散らした場所でもあつたらう。

現代は天気予報に頼つて生活している私達、當時を想像が難いけれど地元の話から少しで

も分るうとしてみたい。

「夕暮時筑波の山がはつきり見えると、翌日はよい天気だ。明日の予定も確り組めた。筑波の山に雲が掛ると雨や風が来る。雨なら漁に出る。風が吹けば休みだ。男達は困つた顔をする。嫁は心の中で喜んだという」

「利根川を上つて行くと、日光連山の方が黒雲で一杯、暗い感じだ。大雨が降つていふという事だ。次の日は勢いよく大洪水が下つてくる。最寄の河岸に舟をつけ雨の引くのを待つそう。こんな時男達を待っている遊び場はいくらでもあつたという」

「大井戸、高崎からみて南の方に入道雲が出て、南から東へ北へと動き出すと台風が来る。漁師も百姓も大騒ぎだつたという」

「ついこの間、最後の舟大工といわれる人が、最後の舟を取手に納めるので土浦から霞ヶ浦に出たそう。私達の先生と先輩を乗せて頂いて取手迄行つたそうだが留り水となつて湖でも揺れたという。筋道の様に流れる利根川もとても揺れたという。以前は水面は台地と繋がり、川の流れも一緒になつて動く水だつた頃はもつと、もつと舟の揺れは酷かつたらう」

「漁師も、百姓も、山師も自分達の生きていく場所を確り知つていて、苦しい中で季節の移ろふ時々に、生命の喜びを感じ生活や文化を育んできたんだと話してくれた」

「女郎宿はありましたか」と聞く事も一寸憚る。増して知り合ひのいる所程聞きが悪いものだ。知つていふ範囲にしよう。

大井戸周辺では話を聞いた事はない。

川中子でも聞かない。舟着場の近くに蕎麦か、

うどんをぶつて食べさせてくれた店があつたと聞いただけだ。

巴川も大分上つて美野里に入つて（いろは屋）という女郎屋があつたそうだが、人権問題に成り兼ねないので今は屋号では呼ばないし、話題にしないそう。

小川町は九十九折といわれた園部川を上つた最初の町だ。高瀬舟が入つた河岸には五、六人の名のある河岸があつた。お船頭達が○に水の旗を立て、江戸へ出航したのも此処からだ。今は旧川にコンクリートの蓋がされ駐車場となつた。倉庫の跡も野菜の直売所になつた。水神さまと傾いた大きな樹と石仏が昔の姿を残している。河岸も盛んで町も賑わつて、威勢のいい人達がいた頃は、宿もあつたらうか。

高崎は上玉里村から高崎村となつた所で、漁を中心にしてきた。今の上高崎には銚子の宮という御留川北の境になる所がある。下高崎にある恵比寿神社は御留川は漁始めの神事行われる場所だつた。上高崎には四ツの河岸を中心にした人の流れ、下高崎には漁中心にやつてきた人の流れが出来ていった。

恵比寿神社の先垂には人家がなかつたといひたが、今は三十軒ちかくある。東の山の上にある館山神社は漁に係する人の参拝が絶えなかつたという。古くは権現山古墳、館山城と流れを眼下に、台高く長い歴史を刻んできた。台の眼下に波が打ち寄せていたという。周辺の畑は白い砂地である。石段の両側には大きな石灯籠が寄付した人達の名を刻んで苔生している。祭りは五月五日だつたが、田植え時期と重なるということ一月遅れの六月第一日曜日になつたが、常会長達が掃除を

しお参りする程度という淋しさだ。

往にし、神社に行く迄にがき坂という坂が曲がり曲がって続いていてその間に茶店や女郎屋が何件もあったらしい。女郎屋の二階から湖面に行く船に向かつて、お女郎さん達が赤い腰巻を振って客呼びをしたそうだ。話してくれた土地の古者は続けて、余所からの客ばかりでなく土地の男達もどれ程通ったか、又山越に走って隣り村から木の間隠れにやってきた奴等もいたそうだ。家を出て行く時の男達の繕う姿を思うと滑稽にもなっている。坂の途中に行き倒れの坊さんの塚がある。坊さんも女郎の毒気にやられたんだと続けて話してくれたが、その後下の部落からの火が山を嘗めつくし神社に燃え移る出来事があったが、茶店や女郎屋はどうしたのか不明だ。お女郎さんの身は辛いものがあつたらうに、此処の話しから何故か明るい感じをうけた。

古代から豊かに栄えた高浜にも二、三ヶ所あつたと聞いた。

高浜台の奥に田中がある。山王川は以前は蛇行して田中村外れの牛塚を過ぎると難所があつた。

高浜村、田中村、高崎村の境の所だ。大雨の降る夜は堤が切れるのを心配して、各村総出で見張るのだった。自分達の堤が切れると川の水が自分達の村の田を超えて部落へと流れ込むからだ。必死の思いで暗の中、雨にうたれ、沈黙し川の流れを見詰める目の動き。突然「わあ！」と悲鳴と歓声が一度に上った。田中村側の堤が切れたのだ。その年の米の出来具合に大きく影響するからだろうが、二つ村の百姓は去っていった。その後田中村の百姓は大変な作業をしたと文章にあつた。実りの悪い年には秋山王川の橋を哀れな娘が渡

ってくるのは常だったという。橋の手前で親と別れ世話役の男に連れられていくのだった。坂を上りきった所に女郎屋があつて、その奥は延延と林が続いていたそうだ。近くを円妙寺街道が中津川まで続いていた。今は草々に遮られて歩きにくい。墓も何ヶ所がある。古老の話によるとその周辺の木々は女郎達の悲しみや恨みを残し、崇つて女の内股のようになっていくという。そんな話を聞いてから見るでもなく見てしまう。一寸恥ずかしい気もするが本当かというと好奇心もあつてか。此処のお女郎さんの話しは何故か物悲しい。この前通つた時酒の臭いも、白粉の香りも漂つてこないが、貧乏草が一面咲いていた。秋には花魁草が咲くだろう。

私が聞きかじつた事で、掘り下げて学んだ訳合もない。伝えてくれた人の経験や生活の中で、暖めていた物を受け取りました。人間の喜びや悲しみの一つを私からあなたに伝えるのが役目だと思ひ書きました。

### 常陸風土記の丘展示室

兼平ちえい

西暦六四六年茨城県のほとんどが常陸国として誕生し、国府がおかれた石岡は政治・経済・文化の中心として、又茨城県最古の都市として大いに繁栄し数多くの遺跡や価値あるものが発見されている。その出土品の一部が展示してある施設として当会報先月号（七十二号）にて石岡市民俗資料館をご紹介します。今回は常陸風土記の丘内にあ

る展示室の石岡市内で発掘された埋蔵文化財の展示をご紹介します。

展示室に入ると古代石岡の年表パネルに示されている旧石器から縄文、弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安時代と年代順に埋蔵文化財が展示されている。まず旧石器時代の石器や縄文時代の土器類は常陸風土記の丘の台地である宮平遺跡からの出土品がほとんどである。常陸風土記の丘は小高い竜神山（標高一七六・九m）の麓に広がるなだらかな台地で旧石器時代から奈良時代に渡って多くの人々が暮らしてきた場所であり、先人達の懸命に生きた証が繰り広げられてあつた。

南側を恋瀬川が流れ、台地の南に入りこんだ谷津には、江戸時代に築かれたとされている金山池が今も水を湛えている。

常陸風土記の丘の建設に伴って昭和六十三年から発掘調査が行われたこの宮平遺跡は幾時代にも渡って人が住みついてきた為多くの遺構が重なりあつてきたそうである。またこの遺跡では縄文時代中期から後期まで人々が連続して暮らしていたため、土器の形が変わっていく様子を知る事ができた。

室内のケースの中に目を移すと旧石器時代のナイフ型石器の黒曜石の黒く優しい光沢が上品である。そして縄文土器の面付土器や獣面付土器の、人面や獣面が見ている私達を覗いている。次に進むと赤い布の上に有る物が目にはいる。巴形銅器である。青銅製で盾などに付ける飾り金具で、奄美諸島近海に生息するスイジ貝がモデルであると言いが、まるで手裏剣のようである。主に西日本に多く分布し、古墳時代のお墓からの出土が多く、風土記の丘では「ふれあい広場」からの出土で住

居跡からの発見は珍しいとの事である。昨年の一・一までは実物であったが、被害をうけ、残念ながら現在は複製のものである。(発見当時、茨城県では初めての出土)

続いて縄文中期の東大橋原遺跡の出土品、弥生から古墳時代の外山遺跡(南台、二子塚遺跡(築集舎)からは旧石器時代の製作場(約二万年前)と江戸時代の墓が発見された。

次は古墳時代へ。茨城県最大の古墳(二八六mの前方後円墳)である舟塚山古墳。周辺の陪塚(はいちよう)と言われる円墳から出土した短甲、盾、直刀が見どころ。国指定史跡となっているが墳丘に登り見学ができる。

続いて飛鳥時代の茨城郡の官寺である茨城廃寺跡からの出土品「茨木寺」「茨寺」、寺名が書かれた墨書土器に見入る。茨城廃寺跡は昭和五四年(五六年)の調査でほぼ全容は明らかにされていますが、平成二十三年度からの調査で寺域の範囲や内容が確認され「茨城郡寺」であることが確認された。今年の平成二十四年三月石岡市の史跡に指定された。また新たに発見された出土品の公開展示が楽しみである。

次に常陸国府跡。奈良、平安時代の常陸国の役所跡で現在の県庁に相当し、七世紀末頃から十一世紀頃まで存続していた。平成十年度から十八年度までの発掘調査により石岡小学校の校庭の地下から多数の建物跡が発見され、一辺が約百m区画の中に整然と配置された国庁と曹司が確認され平成二十二年八月五日に国指定史跡となった。

次は国家安泰、無病息災を願った聖武天皇の詔で建立された常陸国分僧寺、尼寺。二寺とも国指定特別史跡に指定されている。いずれも屋根瓦、

土器類の展示品が多い、中でも法華滅罪之寺と称される尼寺から出土された「法華」の墨書銘のある土器の存在は注目である。

最後に鹿の子C遺跡。地下の正倉院といわれ昭和五十四(五十七)年の発掘調査の結果、奈良時代から平安始めにかけての特殊な性格を持つ遺跡で、特に鉄・銅製品を製作する工房跡が注目に値するもので、農耕用具や武器、武器を生産していた事が窺いしれる。出土品は多く展示されている。東海地方から持ち込まれた貴重品の灰釉陶器、「大刀」「鞘作」「矢作家」の墨書土器、釘、鏝、鏃、刀、小札等の武器等、人面墨書土器や硯、砥石等千二百年前の遺物が語りかけてくるようである。この遺跡で名を世に広めた漆紙文書(円形、半月状で赤外線カメラによる判読で当時の行政文書である事が判明、漆を貯蔵する容器の蓋紙として文書を使用、当時の戸籍や出挙帳が残存、当時の常陸国の人口は二十二(二十四)万人の人口と推定)が平安の世に懸命に生きた証を現在の混乱の平成の世に英知とよすがを届けてくれるにちがいない。是非実物の漆紙文書の公開も望みます。

以上紹介しました展示室は常陸風土記の丘内の有料エリアになっています。土、日、祭日は展示室内に石岡市歴史ボランティアの会員が皆さんのお越しをお待ちしています。楽しく石岡の歴史をお伝え出来ると思います。

常陸風土記の丘は数多くの歴史遺産を活用して自然と文化が共存した生涯学習の場としての施設となっています。どうぞ次代に語り伝える為にもお子さんそしてお孫さんとの見学もお薦めします。

参考資料「石岡市の遺跡」石岡市教育委員会

・子らの笑顔みどりの風におどる

ちえこ

心は今、与那嶺島へ

小林幸枝

もう数年以上前からですが、沖縄にすっかり心を奪われています。去年は数年ぶりに沖縄旅行に行ってきましたが、沖縄は矢張り私の恋する地でした。

沖縄の人達は、何があっても笑いと歌と踊りを忘れません。勿論そこには泡盛があつてですが。いま私がどうしても行ってきたいと思つている所が日本最西線で台湾との国境近くにある島、与那国です。島の周囲を流れる黒潮はカジキなどの大型回遊魚の宝庫で、釣り人達にも大人気の場所です。

島には固有種の馬がおり、世界最大の蛾もいるのだそう。蛾はちよつと遠慮したいけれど、馬なら乗ってみたい。でも野生馬なら乗るのは無理ですね。

## 工房オカリナアートJOY

母なる大地の音を自分の手で  
紡ぎ出してみませんか。

あなたの家の庭の土で…、  
また大好きな雑木林に一滴みの土を分けてもらい、自分の風を「ふるさとの風景」に唄ってみませんか。  
オカリナの製作・オカリナ演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2465  
Tel0299-55-4411

与那国島に行つても見ても見たいのは、海底遺跡。1986年にダイバーによつて発見された巨大な一枚岩で、人の手で加工されたような形状から、古代人の建物ではないかとも言われましたが、その後の調査でも詳しいことは分からず謎のままです。

夢ですが、その巨大岩の上で水中の天女のように舞を舞つてみたら謎の人魚になるのではないかと思つたりもします。

6月15日〜17日は、ギター文化館での定期公演です。今回は、常世の国の恋物語第三十話。美浦村は大須賀津に伝わる将門伝説を基にしての創作恋物語で、モダンダンスの柏木由紀子さんとの共演です。私は将門の亡霊となつて、柏木さんは将門が最後に愛した苺萱姫となつて舞を舞います。今回は、オカリナの野口さんがCDを制作中なので、ピアノ演奏をバックに舞を舞うことになり

ます。

今回の将門伝説は、8月に行われる「日本の芸術文化の祭典 in マカオ」でも柏木さんと一緒に演じることになっており、初めての海外公演を今から楽しみにしています。

## 《ふふ》

アパレル・雑貨・書籍を扱うお店です。

(ギター文化館通り)

看板娘(犬)「つうし」ちゃんか

皆さんをお迎えいたします。

090-9000-4300000

## 《特別企画》

虚構と真実の谷間

打田昇三

第四章 霧の中の栄光(2・3)

「冤罪(えんざい)」は現代でも跡を絶たないが、安倍貞任の場合は女性がらみであるから「艶罪」になるようで、縁談を断つた女性というのが同じ頃に東北地方へ流されて来ていた或る公卿に口説かれて恋愛関係にあつた。それを知らずに貞任が結婚を申し込んだために、悪者にされたらしい。いづれにしても「大過無く任期を終え奥州を去ること」が不本意であつた源頼義にとつては藤原光貞兄弟が持ち込んだ「犯人不明」の事件は実に良いネタになつた訳である。

阿倍頼時は、貞任を出頭させれば事情聴取も裁判も、場合によっては本人確認さえも行われずに犯人として処刑されてしまうことが予測されたので、直ちに一族郎党を集めて「国司の不条理」に對し断固として戦うことを決めたのである。日本外史では「是に於て、頼義、貞任を執へ(とらへんと欲す(ほつす)。頼時、乃ち(すなわち)兵を挙げて反し、衣川関に拠る…」とある。阿倍軍は衣川の関を閉ざし臨戦態勢を以て臨んだ。

これを知つた頼義は自分のことは棚に上げて安倍氏の行動に腹を立てた。「それならば彼の一族一家を一人残らず誅戮(ちゆうりく)罪あるものを殺害することすべし」と言つた。この発言に征服者の思ひ上がりと錯覚がある。しかし幾ら偉そうにしても手持ちの兵力が少ないから、源頼義の陸奥守在任期限内に事件を抑え付けられない恐れがある。何とかして勝負を決しなければ…と勢い込んだのだ

が要衝・衣川に籠つた阿倍軍は強くて強くて、とても歯が立たない。

そこで切り札とも言うべき「鎮守府將軍」の肩書を悪用して諸国の武士団に出動命令を發した。

この場合、東北地方ならば直ぐに召集できるが、地元では合戦が起つた裏事情がバレてしまう恐れがあるから、常陸国の多氣大掾氏、下総国の小山、結城両氏、上総国の千葉氏、武蔵国の江戸氏と川越氏、下野国の宇都宮氏、上野国の利根氏などを出動させた。「安倍貞任が女性問題の恨みから將軍の陣營に攻撃をしかけ、これを裁こうとした將軍に對して阿倍一族が反抗した」という事実無根の堂々たる「嘘」が国の治安と防衛を担当する將軍から命令として發せられたのである。こうして鍋が焦げた程度で消えた台所に消防士が火を付け直したように「前九年の役」が再開された。

平忠常の乱が収まつて二十五年、各地で退屈していた東国の武士団は鎮守府將軍の出動命令に従つて衣川陣に集まつてきたのだが、国会と違つて数だけ多ければ良いというものでもない。阿倍氏の軍勢は強固な陣に拠つているから攻めるに攻められない。頼義にしてみれば達磨のコレクションと同じで、数だけ揃えたが手も足も出ないことになる。此の時に永承六年に起つた陸奥国司と秋田城介が組んで阿倍頼良と戦つた事件では阿倍軍に加わつていた平永衡も、今回は將軍に従う形で攻撃軍に居た。この人の妻は阿倍氏の娘である。天下の將軍が「嘘」をつくとは思わないから私情を捨てて義の為に官軍に加わつたのであるが、源頼義はこれを疑いの目で見ている。

この時に永衡は銀の兜を被つていた。察するに大義に殉ずる決意の表明であつたと思うが、これ

を「裏切り」と解釈したお節介が居て「合戦になつても敵方から狙われないように銀の兜を被り、時期をみて敵方に回るつもりでしょう…」と頼義に告げ口をした。当時の合戦は矢戦さから始まるから陣中に永衡が居て、敵が攻撃目標から外してくれば助かるのは味方である。また乱戦の中では銀でも金でも一々区別している余裕はないからこれは全くの言い掛かりなのだが、この馬鹿げた意見を頼義は喜んで採用して永衡を斬った。

これを知つて身の危険を感じたのが、先に述べたように平永衡と同じく阿部頼良（頼時）の娘を妻にしていた藤原経清である。亘理権大夫という職務から陸奥守に従う形で源氏の陣中に居たのだが、永衡が即座に斬られたことで源頼義の冷酷さを知り、側近の武士と凶つて或る作戦を行うことにした。それは「…安倍軍の一部が、將軍の妻子を捕らえる目的で間道伝いに国府へ向かつた…」というデマを流して官軍の陣営を混乱させることである。「嘘」を武器にしたこの作戦には金がかからない。卑怯な気もするが「前九年の役」自体が嘘で出来ているようなものなので上手いといった。前太平記は「それ一犬形に吠ゆれば百犬声に吠ゆ、一人偽（いつわり）を伝うれば百人真まことを伝え…」と記録している。官軍の武士たちは動揺した。さすがに將軍の源頼義はやせ我慢をして居たけれども、回りから言われて止むを得ず多賀城に引き返してきた。そのどさくさに紛れて藤原経清は八百人の部下と共に安倍陣営に走った。

最初の事態と同じで希望者が居ない。一方、頼義のほうでは、此処で交代させられては吠えただけの犬になってしまうから、多少の無理をしても現職に留まりたい。結局、頼義の留任が決まった。そうは言つても物騒な出来事が続く上に作物の不作で国内が飢饉状態にあつたから何よりも出しゃばつてきた官軍は兵糧の欠乏に悩まされた。合戦を商売にする武士団は兎も角も、徴発された兵士たちは食料物が貰えない軍隊に用は無い…脱走者が続出して、とても戦争どころではなかつた。

武士だなどと偉そうなことを言つても何も出来ない將軍・源頼義は、苦肉の策で奥六郡と呼ばれる糠部（ぬかのぶ＝青森県東部、岩手県北）を抑える安倍富忠を味方につけることを思いついた。此の人物は日本外史に「…頼時の族」とあるので安倍頼時の従兄弟か甥ぐらいの關係と推定したのだが違つていた。頼山陽が「嘘」をついたのでは無く、東北地方には大和朝廷に追われて北上していった縄文系の人々以外に逆に北方から下つてきた民族が居たということらしい。青森県史では「夷人」としている。陸奥国に土着し有力部族の安倍姓を名乗ることで勢力を広げていったのである。本来ならば頼時に味方して征服者と戦う立場なのだが「美味しい嘘」で誘われるとコロツと寝返る。その結果が、古来の民族の滅亡につながる…という大事に気付かない。その罰で富忠は安倍頼時を討ち死にさせる功績をあげながら、源氏の栄光に踏み潰されて碌に名前も伝わっていない。

「嘘つき」は源頼義だつたようで阿倍富忠を味方に付けるに当り勝手に「勅旨天皇の御命令」だと言つたらしい。三陸沿岸で水産業や林業などを手広く営んでいた気仙沼の豪族で郡司を勤める

金為時（このためとき）を仲介役にしたと言われる。その場合に名前だけで判断すると銀行か郵便局から来たようなこの人物は、預貯金の金利で相手を誘つたのかどうか知らないが、富忠だけで無く沿岸部を回つて各地の有力者を官軍に引き入れた。安倍頼時が、それに気付いて兵二千を連れ説得に回つたけれども手遅れで両軍は激戦となり頼時は流れ矢に當つて鳥海柵（このみのさく＝胆沢北部）で死亡した。平将門の最後に似ている。反逆の英雄は「誰が倒したかの分からない」ことにしないと崇りが恐ろしいのであろうか。天喜五年（一〇五七）七月二十六日のことである。歴史の嘘は、これを源頼義の功績と記録している。

族長の頼時を失つたが、阿倍一族の結束は固く長男の貞任（さだとう）を中心とした集団指導体制を敷いて抵抗を続けることを確認した。頼義のほうは阿倍頼時を倒したことが余程、自慢だつたようである。「国解（こくげ）国司が中央に提出する公文書」を以て自分たちの手柄を報告し、爵位を下すようお願いをした。つまり朝廷の權威を笠に食糧調達や人員徴発を進め、自分たちの合戦を有利にする魂胆であつた。これに対し朝廷内で一応の論議はしたのだが、国解の内容が「嘘」とは言わないまでも、何となく手前味噌の香りがするので無視することになつたから、頼義らの官軍は乏しい食糧と十分では無い兵力で合戦に臨んだ。

天喜五年の十一月に、前九年の役前半の山場と言われる「黄海（このみ）の戦い」が行われた。一の関の東南、十数kmの北上川沿岸地帯である。折しも雪は積もり吹雪く厳寒の中で冬場に慣れた安倍貞任以下四千余の精兵が待ち受ける戦場に、寒さと空腹と疲労とで戦意を失つた官軍千八百余が、

將軍に言われたから仕方無く出陣してきた。一応は激戦となったのだが、子供でも予測できるように官軍が大敗を喫して死者数百、逃亡者数知れず、残ったのは將軍・頼義と息子の八幡太郎義家、それに側近の武士とで合計七騎しか居らず、何度、数え直しても増えなかった。此の時に八幡太郎義家の活躍がめざましかった。この時に八幡太郎義家は書いてあるが目が覚めていようが眠っていようが、合戦は勝たなければ意味が無い。此の時に頼義が一時、行方不明になり、それを悲しんで側近の武士が坊主頭になった。そこへ頼義が現れて「何だ、その頭は？」と咎められた。官軍というか源氏武士団はそれ程に負けたのである。

これに懲りて源頼義が手を引けば東北地方にも平和が戻ってくるのだが、例えば悪いがパチンコなどでも大負けすると復讐心に駆り立てられるらしいから、頼義も妙なところで大和魂を発揮して「打倒安倍氏」に執念を燃やした。合戦が長引くと隣の出羽国にも影響が出てくるので、政府は出羽の国司に対し「陸奥守の戦鬪を支援するように命じた。しかし赴任してくる官僚は、この戦争が源氏の野心から起きている「嘘の反乱」であることを察しているから、特別手当てだけ貰って誰も協力をしない。その為に替わった何人かの出羽国司が源氏であったのも皮肉なことである。

出羽国司に見捨てられた官軍が何よりも困ったのは食糧などの不足と兵員の補充で、とても合戦に臨める態勢ではない。「窮余の一策」と言うのが、万策尽きた源頼義が思い付いたのは、阿倍氏と同じように浮囚の長である出羽の清原氏を利用することであった。既に述べたように「浮囚」は蝦夷と呼ばれた人々のうちで大和朝廷に服属した集団

を言うのだが、本来の清原氏であれば始祖は天武天皇を父とし天智天皇を母方祖父とした舎人親王（とねりしんのう）である。此の人は藤原不比等の後を受けて日本書紀を編纂した。舎人親王の曾孫が淳名、仁明両天皇時代に右大臣を務めた清原夏野で、子孫が官僚として地方に分散していた。後で触れるけれども、前九年の役に登場する清原氏が銘柄の清原かどうかは諸説があるらしい。

源頼義に狙われた頃の清原氏は出羽山北と呼ばれた秋田県の「雄勝、平鹿、山本（仙北）三郡を束ねる豪族であった。名族の末流という意識が他の浮囚の長とは違つて、最終的には官軍に味方したのだと思うが、頼義も最初は口説き落とすのに苦労して豪華なプレゼントを送り続けたらしい。そこまでしなければならぬ「戦争の大義名分」とは一体何なのであるか：現職の將軍が「嘘」から始めた合戦はもはや、泥沼の状態にあった。

康平五年（一〇六三）の春に源頼義の任期が切れるため、朝廷は後任者を送り込んだ。合戦が長引くのは頼義の作戦、用兵に問題があるのでは：とする意見が政府内に起こったようである。しかし「：国民、頼義を慕いて経重（後任者に補された高階経重）に服せず。経重已むを得ずして去る」と日本外史にある。負け続きの状態で頼義が退きさがる筈は無いから、追い返す策を講じるのは当然であり「：国民云々：」は当然、「嘘」である。

清原氏の当主は光頼と言った。さすがに現代の政治家と違つて、貰う物は貰つても簡単には動かない。半年以上も焦らしてから、弟の武則が大軍を率いてやって来た。その数は一万余、源氏は掻き集めても三千の兵しかいないから恥ずかしい。官軍と言うのも気が引ける集団は第一陣が武則の

子・武貞が将となり、第二陣は甥の貞頼が率い、第三陣は甥であり婿でもある吉彦秀武（きびこのひでたけ）が陣頭に立ち、第四陣の將は貞頼の弟・橘頼貞、第五陣に源頼義と清原武則と陸奥国府の兵が控え、第六陣は吉彦一族の武忠が守り、第七陣は武貞の弟・武道の指揮と、誰が見ても清原軍団に見える編成で阿倍一族に対決したのである。

清原軍は秋田から南下してJR陸羽東線に沿うように陸奥国に入り、そこで陸奥国府から来た官軍と合流して、先ず小松柵（この柵）から攻撃を始めた。阿倍軍は宗任と叔父とに率いられた精鋭部隊が必死の奮戦を展開したのだが柵は落ちた。阿倍軍は將の貞任が率いる部隊が官軍に夜襲をかけるなど攪乱戦術で応戦した。しかし大軍に押されて胆沢城に近い鳥海の柵を捨て、盛岡市北西の北上川沿いにあった厨川（くりやがわ）の柵（本城）に立て籠つた。康平五年九月十五日、要害の厨川も、数を誇る清原軍に囲まれた。両軍は矢を射掛けたが、この段階では互角の戦いを展開していた。そのうちに誰が言い出したのか「エネルギー節約」のため、拾って来た石を弾丸にして撃ち合った。ところがエコな「石合戦」になつてからは包囲した官軍の死傷者が急に多くなり、千人ほどが安上がりな死に方をした。

これに怒った源頼義が思い付いた攻略方法が「火攻め」である。古来から「焼き払い」は合戦の手段に使われてはいたが、自然の谷間や断崖などを利用した柵には可燃物が少ないから効果が疑われる。頼義は関係の無い所で源氏学園の高等部で教わった漢文の教科書に「：人積輜庫隊の五火の変を知り、巖かに日時昼夜の度数を推して之を発（はな）ち、其営柵を焼き、其隊伍を焼き、火を

用て攻伐の助とす。之を慎み之を警(いまし)む万全の利に合うときは、安国全軍の道なり」という孫子の兵法があつたのを思い出した。

現状は全く孫子の言う条件に合っていないが、朝敵を退治する自分には神の御加護が有る、と勝手な理屈を付けて放火作戦を強行することにしたのである。そして燃料を探したのだが、燃えるものは頼義本人の野心ぐらいで何も見当たらない。そこで兵士を動員して山野の茅(ちがや)を刈り集め、近隣の民家へ押し入って住家を壊し、それを集めて薪(たきぎ)とした。正に鬼畜の所業である。

頼義は遙かに鎌倉を遥拝して八幡宮に祈り「どうが大風が吹いて厨川柵が良く焼けますように」とお祈りをした。すると何処からともなく一羽の白鳩が飛んできて陣営の上空を旋回した。途端に大風が巻き起こって火の手を煽った。頼義は「これぞ八幡大菩薩の御加護」と満足した―これが日本外史や前太平記など多くの史書が伝える厨川柵落城(安倍氏滅亡)の概要である。

白鳩に限らず、黒い鳥でも煙を見れば怪しんで飛んで来るし、その辺で焚き火をしても小さなつむじ風が起こるから放火すれば風は自然に動く。これは当たり前前で、奇跡でも何でもない。八幡様でも七福神でも人道に背く奴に御加護を与える筈はないのである。こうして安倍一族は滅ぼされた訳であるが、後の世に安倍氏の子孫と称する人々が東北地方のみならず東海、近畿、九州に迄も居て地方の豪族として活躍したと言われる。阿倍氏は賊でも悪党でも無かった。さらに源氏の陣営から脱出して阿倍軍に加わった藤原経清は、頼義の憎しみを受けて残酷な方法で処刑されたが、その遺児が清原氏に組み込まれ、やがて平泉に藤

原三代の栄華の華を咲かせることになる。しかし、その勢力は天下を取った源頼朝を恐れさせ、阿倍氏と同じように因縁をつけられて消される。日本の歴史は「嘘」が多いが、前九年の役として伝えられる話は真実であると思う。しかしそれは官軍と称した源頼義が在地の豪族・清原氏と共謀して阿倍氏を滅ぼした悪辣冷酷な手段が真実なのであって、文字に記録されたことの裏にある当事者たちの心は全くの「嘘」で埋められていた。多分、当時の朝廷はその辺りのことを薄々は察していたと思われる。戦後の褒賞にそれが表わされている。康平六年二月十八日、阿倍貞任、藤原経清

らの首が乱平定の証拠品として都に運ばれた。証拠品が届いたので二月二十七日には論功行賞が行われ源頼義は正四位下・伊豫守になり、息子の義家は従五位下の出羽守に補任された。また義家の弟・義綱が左衛門少尉(さへもんしょうじょう)衛門府の下級将校、官位は大掾職(同じ)を命じられた。この場合、国司の官位は例えば大國の常陸でも従五位上が相場であるのに、頼義は二ランク下の上國・伊豫守で参議並みの正四位に叙されている。

此の辺りの人事は公家たちが余程、頭を使ったように「前九年の役」に於ける頼義の暴走を苦々しく思いながら浮囚の阿倍氏を潰した褒美に名譽だけで四位を与えたのであろう。伊豫国は海賊の本場なのでそちらを抑えさせる。昇殿の資格はあるが頼義の年齢が六十歳を過ぎていたから参議にしなければ四位でも都に出しやばつては来られない―政府はそう考えた。しかし、役者は頼義のほう一枚上で、肩書きだけ貰って伊豫国へ行こうとはせず地元役人を困らせた。奥羽地方に未練を残していたらしい。

一方、大軍を率いて味方した清原武則は従五位下、鎮守府將軍となり、兼ねて陸奥国奥六郡の押領使(おりのりようし)逮捕の権限を持つ郡司に大抜擢されたのである。これは当然のことなのだが、野心満々の源氏にしてみれば東北地方の軍勢力を握る「將軍」に未練がある。義家は出羽守になったが、出羽は清原氏の本拠であるから仕事はやり難い。親孝行にかこつけて越中守に替えて貰うように頼んだらしい。さらに、戦鬪に参加した源氏一族や家臣団には何の御沙汰も無かったから頼義は当てが外れた。頼義は「上疎」と言つて意見書の形で自分たち源氏の手柄を朝廷にPRをしたけれども、それらの願望が効き届けられた記事は見当たらない。仕方無く頼義は周りの連中に自腹で褒美を与えた。これに感激した武士団が恩義を感じて源氏に従うようになった。というのが歴史の通説であるがこれは真つ赤な「嘘」であり、起こる筈の無い戦さを起こさせたのが源氏であるから、自分で代価を払うのは当然である。

さて記録を見るとあれこれゴネていた源頼義が都へ戻つたのは合戦終了から三年目の康平七年(一〇六四)三月二十九日になっている。この人にはそれ以来、出る幕が無く源氏は息子の八幡太郎義家の時代になった。それでも奥羽地方から本拠地の鎌倉へ来る迄の間ぐらひは、従う東国武士団から「源氏の大御所」としてチャヤホヤされていたのである。陸奥国にいたのは永承六年(一〇五二)からで既に十三年の歳月が経過している。思い出せば十三年前は、鎌倉から東海道線で終点の石岡まで来て常陸国府に一泊し、翌日は表筑波にある常陸大掾・多氣(平)致幹の館で寛いでいただいた。隠して申し訳なかったのだが実はその時に接

待の席には六、七歳の可愛らしい娘がいて愛嬌を振り撒いていた。頼義様には、帰りに筑波温泉で寛いでいただく約束を大掾致幹がしていたし、東山道から東海道經由で鎌倉へ寄るには乗換え経路でもあったので、凱旋將軍・源頼義公は多賀城の陸奥国府から来て多気館で一泊している。その時に、十数年前に泊まった際の童女のことを思い出して「かの者は健在か？」と尋ねた。ここから先は情緒的な場面になるので、正確を期すために前太平記の記事を引用する。「源將軍、奥州下向の時、此の宗基が館に止宿し給ひけるに、年の程六、七歳計（ばかり）の振分髪（ふりわけがみ）なるが、生立賢（おいたちさか）しく、父が後に付て、手に余れる高杯（たかつき）など持ちて將軍を饗（もてな）し進（まいら）せけり、斯（かく）て朝敵追討あり、上落の時も、亦（また）、宗基が館に逗留し給ひけり、彼少者（かのおさなきもの）はと尋給ひけるに、今年は十八に成りて、最眞實（いと、まめやか）に長（ひと）とな（りぬ）（美しく賢く成長しました）と申しけるを、密（ひそか）に召して、仮初（かりそめ）の旅寝の枕を並べ給ひけるに、一人の女子をなん儲（もろ）けたり、祖父・宗基、斜ならず悦び冊（かしづ）きて…云々」

を伝える史書は少ないが「嘘」ではないと思われる。実は、この「多気氏の娘」に縁談が持ち込まれたことから「後三年の役」が起こったのであるから嘘である筈が無い。どうも常陸国には「後三年の役」のように、重要だが地元ではあまり知られていない歴史が沢山に埋もれている。「平忠常事件」そして「佐竹氏討伐」「曾我兄弟の仇討」さらに「南北朝時代の対立抗争」「加波山事件」から「血盟団事件」「五・一五事件」などである。致幹の家系が多気氏を称したのは曾祖父の維幹からとされる。平将門の乱の勝者として常陸国の広大な領地を手にしたのは平貞盛であるが、貞盛は吉幾三の歌に感化され生意気にも「おら、都さいぐだ！」とばかり、領地を弟の繁盛に譲って茨城を捨てた。やがて伊勢国が神様の地であるため誰も憚（はばか）つて近づかなかったため、其処に目を着けた貞盛の子孫は「伊勢平氏」として世に出る。そして活躍の場を西に求めた。貞盛は未だしも、西に延びた桓武平氏の意識や遺伝子からは苦勞して筑波山麓に定着した祖先の高望王や平国香のものは消え去ったと思われる。その替わりというか、或いは当然のことかも知れないが東国各地には大掾一族を始めとして「平国香を祖先」とする武士団が広がった。

つづく

## コーヒーフレイク

### 研究の抑制

菅原茂美

昨年12月、米国の国立衛生研究所（NIH）は、米国とオランダの研究グループに対し、鳥インフルエンザに関する研究発表を控えるよう強く要請した。理由は、両グループは哺乳類のフレットに鳥インフルエンザウイルスの感染実験に成功したというもの。ということは、もしこの技術がテロリストの手に渡れば、将来人類に鳥インフルエンザ攻撃をかけられる恐れがあるからだという。両グループは発表を控えたが、米国グループの主体となった東大医学研究所の河岡義裕教授は、Nature誌に反論を寄せた。鳥インフルエンザの変異によるパンデミック（2019年のスペイン風邪も同じ）の危険性が増大している今日、生物テロへの可能性を恐れ、論文公表を抑えれば、ワクチン開発を遅らせ、社会に対しかえってリスクが大きくなる。これに対し、NIHは再び発表抑制を促したが、世界保健機構（WHO）は河岡教授の発言を認め、むしろ研究促進を要請した。これらの問題に対し日本政府は、全人類の危機を救う可能性のある研究なのに、無言で看過するのは問題であると、日経サイエンスの論説員は唱えている。

（出典：日経サイエンス12年4月号 S・S）

## 【風の談話室】

今月は、ヨイシヨの会の方からの投稿はないのかな、と思っていたら6月に入って田島早苗さんから郵便が届いた。

原稿の他にこんなメッセージが書かれていた。メールで送るつもりで打ち出しましたが、悲しいかな送り方が分かりませんでした、と。

メールに文章を添付するのなんて、原稿を打つよりもはるかに簡単なことなのであるが、初めはなかなかうまくいかないものである。

小生もそうであったが、頭の中に難しいものだという「新しきを拒否」の言葉が駆け巡っているものだから、どうしてもうまく覚えられなかったりするのである。

しかし、今は年を取れば取るほどパソコンは有難いツールであると思っている。特に、メールは有難い。切手を切らして買っていく手間はないし、雨の日に傘をさしてポストまで行く必要もない。電話のように時間を気にする必要もない。

資料探しも図書館や本屋に出かける必要はない。思い立てはすぐに実行できるのである。昨年、大地震の前に低血糖で倒れ、立ち上がることもままならぬ時も、「ガハハ、俺さ、今ギックリ腰で動けねえんだよ」なんて便りを時間を気にせず出すことが出来るのである。

小生のインターネットへの接続は、石岡にやって来てから始めたのであるが、便利に使わせてもらっている。

若いतर子に任せではなく、若いतर子に任せずPCを使えたいと思っている。

## 《ヨイシヨ広場》(陸平をヨイシヨする会)

震災の地、仙台へ

田島早苗

陸平をヨイシヨする会の仲間と一緒に、震災被害の修復が成ったという、奥松島縄文村歴史資料館”に出かけた。資料館の被害は何の痕跡も残っていないなかったが、一年過ぎた今も尚津波の痕跡が一杯残る被災地の現状を目の当たりにして、情緒不安定になり涙ぐむ事の多い旅だった。

仙台駅で東北新幹線から乗り換えた仙石線は松島海岸駅で行き止まり、代行バスに運ばれて一路野蒜駅へ。海岸沿いを走る鉄路がひん曲がり、赤錆びた無残な曝している。「鉄道が元に戻るまでには5年以上掛ると思います」野蒜駅から乗ったタクシーの運転手がボソリと呟いた言葉が重い。聞けばその運転手も津波ですべてを無くし、お母さんもお亡くなりになったという。津波に浚われて更地になり、土台のみが残る広場には手つかずの瓦礫の山が残されている。乗用車が沈んでいる田んぼ、テレビで何度も見てはいたが、現実を目の当たりにして改めてショックを受けている私だった。

東西10kmの小さな松島湾に点在する島々のお蔭で、津波の勢いが弱められた内海沿いの土地は被害が軽く、外海に面したところの惨状と両極端をなしている。田植えが終わった田んぼが続くと安どのため息がでる。でも、塩害の心配はクリアできたのかしら？ 無事に実りの秋を迎えることが出来るのだろうか等々気がかりの種は尽きない。

昼食会場の「大高森観光ホテル」はその名の通り、かなり高地の大高森中腹にあり、お蔭で津波

の被害は少なく、震災も地盤が固かったので軽く済んだという。でもお孫さん達は避難所暮らしのため、高齢のご夫婦二人が店を守っている。お二人の真心の籠った料理はとても美味しく一同満足の中、再びタクシーで奥松島縄文村歴史資料館へ。

松島湾最大の島「宮古島」にある里浜貝塚は、東西約640mの規模を持つ日本最大級の貝塚で、優れた骨角器や多種多様な生活関連の遺物が出土し、当時の生活を復元する上で貴重な情報を提供する貴重な遺跡”として、平成7年国史跡に指定されている。縄文時代のゴミ捨て場と言われている貝塚は唯のゴミ捨て場ではなく、自然の恵みや道具類に対する感謝と供養再生を祈った”送りの場”だった。貝殻のカルシウムに守られた貝塚からは生活の道具類、魚や獣の骨や、丁寧に埋葬された人間や犬の骨も見つかり、昔も今も犬は人間のパートナーとして大切にされていた様子を伺うことが出来る。

貝塚は縄文のタイムカプセルと言われているが、出土した展示物から縄文人の生活様式を想像しながら館内を巡るのは楽しい。工夫を凝らした道具類、バランスのとれた食生活、すべて無から編み出した縄文人の素晴らしさ。ふぐの骨も出土しているが、毒のあるふぐを食べる様になるまでには、多くの犠牲者が出たことだろう。未知の物を口にする時の勇気を思い、それに引き替え先人のお蔭で安全なはずの食を、便利な生活と引き換えに汚し続けている現代人の愚かさ、生きると言うことの原点を見つめ直して縄文人に学ぶ必要があると思う。

宿泊地の仙台へ向かうための雨の中をタクシーで戻った野蒜駅で、津波に流されながら、漂流物

を乗り継いで奇跡的に生き延びたと言う大きな犬に出会った。飼い主は避難所暮らしなので、預かっているという女性は「仮の里親だけどうようやく懐いてくれて」と尻尾をだらりと垂れたままの犬を愛おしそうに見つめながら、駅の前に流れている川を遡った津波の恐ろしさを語り出し、止めどがなかった。そのあたりでも100人以上亡くなったと言う。「この駅舎でも最上階にいた人だけは助かったけど」という無人の駅舎の軒下から燕の飛び立つのが見えた。

仙台はこれが被災地かと思うほどきれいで、送迎バスに揺られて着いた旅館も団体客が一杯だった。ボランティアの団体が2台のバスを連ねて来ていたが、元気な声で挨拶をしてくれた若者と話す時間を持てなかったのが残念だった。

遺跡巡りのせわしない2日間だったが、最後の訪問先「地底の森ミュージアム」で2万年前の遺跡を発掘されたままの状態で公開している。「よみがえる2万年前」という地下の展示は圧巻だった。寒冷な気候の中で300年以上もたくましく生育していた生々しい樹木群の巨大な根っこや倒木が、豊富な地下水と土砂のサンドイッチ状態という好条件に守られ、2万年の時を経て現代に甦った。小学校の建設予定地を深く掘り下げたとき偶然発見され、保全のためすぐに埋め戻された遺跡が、そのままの姿で世界にも類のない貴重な展示物としてお目見えするまでに、試行錯誤の8年間があったという。創生期の地球誕生のドラマの真つ只中において人類の醜い争いとは無縁の世界にいるような不思議な時間だった。

## 《ことば座だより》

### 第23 回定期公演

白井啓治

靡なる湖上の月に思ひの映して、

今宵は花に酔うて舞い惚ぶ

『将門伝説苧萱姫物語』(常世の国の恋物語第30話)

ことば座第23回定期公演は、美浦村に伝わる伝説物語を基にして、平将門と苧萱姫(さくらひめ)にまつわる話を恋物語として創作したものを苧萱姫・柏木久美子、将門・小林幸枝のキャストインで演ずる。

今回の物語は、昨年6月の公演で共演した柏木さんより、ホルストが伊藤道郎のために作曲した「日本組曲」というダンス曲があるのだけれど是非一度それを踊ってみたいという話があり、それならばホルストの「日本組曲」を主題とした常世の国の恋物語を考えてみましょうか、と言うのがはじまりであった。

日本組曲を聞きながらどんな物語にするかを考えているときに、柏木さんよりお借りした美浦村の伝説物語を集めた本に、将門伝説として「苧萱姫物語」というのがあり、それが目に止まったのであった。

以前より平将門の愛した女達を書いてみようと考えていたこともあって、早速この伝承物語をモチーフとした舞物語を書くことにしたのであった。石岡では平将門は、府中を焼き払った悪者にされているが、実は大層に気骨のある興味深い歴史上の人物で、今話題の平清盛よりもはるかに面白い人物であると私は思っている。

歴史の里とは言いながら、石岡では「府中を焼き払った不届き者」位にしか思われていないのは残念な限りである。

さて、今回の将門伝説・苧萱姫物語はホルストの日本組曲の本格的舞台化の前哨戦とでも位置づけるもので、いずれ近い将来に中央の舞台でオーケストラをバックに常陸国組曲とでも名付けて演じてみようかと考え、今企画を練っている最中である。

今回の日本組曲を主題とする将門伝説・苧萱姫物語は、ギター文化館での定期公演終了後、8月21日、中華人民共和国特別行政区マカオにおいて開かれる「日本芸術文化の祭典」においても演じることになっている。石岡に生まれた朗読手話舞が世界に向けての第一歩を踏み出すことになるのである。

ギター文化館発・ことば座の定期公演は、今回で23回目を迎え、常世の国の恋物語も30話となる。ことば座を設立する時に、小生、小林幸枝に常世の国の恋物語百を約束したのであったが、未だ30話である。百物語までにはまだかなり先が長い。しかし、ことば座の発足から6年で30話だからペースとしてはかなりのハイペースなのであるが、あと残り70話と考えると些かぞっとする。それ以上に、寿命との睨めっこを思うと自信が細ってくる。

30話のうち半部近くの音楽を、オカリナの野口喜広さん、矢野恵子さんに担当して頂いた。今回の苧萱姫伝説はマカオ公演では野口さんが担当してくれることになっているが、この6月の定期公演ではピアノの山本光君が担当してくれることになった。

さて今回は、会報の紙面に少し余裕があるので、公演のプログラム等を少し紹介したいと思います。

6月公演は毎年そうなのであるが、ふるさと風の会の発足記念月にあたることから、ふるさと風の会の足跡展を同時に開いている。ふるさと風の会もこの6月で満6年となった。せつかくの合同開催なので、今回は「ふるさと風の会」に寄せられた原稿から、ことば座の公演で朗読をしようということとなり、陸平をヨイショする会の市川紀行さんより投稿いただいた詩「ついに太陽をとらえた」を朗読させてもらうこととなった。

少し長い詩なので当初、抜粋でと考えていたのであったが、せつかく朗読させてもらうのであるから、全編にしようということとなり、すこし巻き気味の朗読になるが全編朗読ということにした。この詩は、本当に声を荒げて言わなければならぬことを確りと声に表現された良い詩であり、朗読者にとっては表現しやすい詩である。

柏木久美子さんとは、今回の公演で三回目となる共演ですが、今回は朗読舞劇「常世の国の恋物語」の他に、柏木さんの師と仰ぐ伊藤道郎の舞踊詩、二作品【山田耕筰作曲、伊藤道郎振付の音の流れ1、2】を舞ってもらうこととなった。

伊藤道郎は、小生から上の年代の舞台人であれば誰もが知る人で、モダンダンスのパイオニアといわれており、海外では広く知られた人です。折角の機会なので伊藤道郎について少し紹介しておきましょう。

伊藤道郎（1893年～1961年）

戦前戦後を通じて世界的に活躍した振付家・演出家・ダンサー。

## ふるさと風の会6周年記念展

「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」を掲げ、自分達の思いや考えを確りと表現していこうと立ち上げた「ふるさと風の会」も5月末でまる6周年となりました。毎月発行しております会報も通巻72号。振り向けば来し方の何と短くある、とは言われますが、どうしてどうして実に大変で長い時間と距離でした。とても春の世の夢の如しとはいきません。

毎年、6月には兄妹グループである「劇団ことば座」の発信基地であるギター文化館での定期公演に合わせて、ふるさと風の会の「歩み展」を開いてきましたが、今年も6月15日（金）～17日（日）（10時～14:30）で風の会歩み展を行います。

### 兼平ちえこ & 打田昇三展

今回の歩み展では、兼平ちえこが会報に一年にわたり連載してきた石岡巡りに絵をつけた小冊子「歴史の里いしおかめぐり」の出版記念として、その原画展および冊子の即売会を行います。

また、歴史の里いしおかにまつわる歴史物語を独自の視点で見つめなおして書き綴ってきた、打田昇三作品を全集としてまとめた「打田昇三全集」（全6巻）も展示及び即売会を行います。

### 風のことは絵同好会展

絵手紙から出発し、風のことは絵という新しいジャンルを確立した兼平ちえこが指導する「ことは絵同好会」の皆さんの展示発表会も同時開催いたします。

自分たちの暮らすふる里をギター文化館で改めて見つめなおしてみませんか。

ふるさと風の会展（10:00～14:30）入場無料。ギター文化館 Tel 0299-46-2457)

皆様のおこしをお待ちいたしております。

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

伊藤道郎はオペラ歌手を目指し十九歳で渡欧したのであったが、イサドラダンカンの舞踊に出会いダンスに転向する。

ドレスデンのダルクローズ舞踊学校で研鑽を積むも第一次世界大戦勃発でイギリスに渡り、劇詩人イエーツの作品「鷹の井戸」の上演で人気を得る。

興行師に招かれてアメリカに渡り、時のジャポニズムの流れに乗り、一躍脚光を浴びる。

日本の現代舞踊に大きな影響を与えたマーサ・グラハムも若き日に伊藤道郎と踊っていた。美しい小品や舞踊詩（ダンス・ポエム）が生まれ、多くの作品が残されている。

今回、柏木さんが演じてくれる、音の流れ（トーンポエム）1・2も舞踊詩で、伊藤道郎が親友であった山田耕筰の曲に、舞いによる詩を創造したものである。その舞踊詩は「未知への恐怖」と「自責」の二つに分けられ愛と恐れとから成る人間心理のモザイク模様が簡潔に織り上げられている。

私が朗読で舞を舞うという朗読舞の発想も、理的には能だとか人形浄瑠璃をヒントとしてということではあるが、伊藤道郎の舞踊詩の延長線上に発想したものと言える。そうした素地がなければ、小林幸枝の手話が舞になると発想することもなかっただろうと思う。

日本ではマニアックな舞台表現と思われる現代舞踏劇などもやはり伊藤道郎の舞踊詩にそのはじまりがあると言っても過言ではない。

今回、柏木さんは山本光君のピアノ演奏で「音の流れ」を舞います。

山本光君には、舞のバック演奏の他に、ミニ

ンサートとしてショパンの「英雄ポロネーズ」自作の「陸平ラプソディー」の演奏を行ってまいります。

小林幸枝の手話に、舞のスケール感を発見し、手話を基軸とした朗読舞という新しい表現スタイルを創出してスタートしたことば座ではあるが、昨年、柏木久美子さんとのコラボレーションを持つことよって、表現の幅、可能性が大きく広がってきたことは大変うれしいことである。

今回の公演では、NHK水戸放送の取材を受けることになった。一昨年来よりNHKの若いディレクターが朗読舞を紹介したいと何度か取材に来ていたのであったが、昨年は大震災などがあり番組紹介は実現できなかった。この企画は流れたものと思っていたのであったが、先日連絡が入り、6月21日に放送枠がとれたので、取材をさせてくれと言ってきた。

手話の新しい可能性と、聴覚障害者の人達の手話劇とは違う舞台表現の創出できることを多くの人に知って貰ういいチャンスになるであろうと思う。小林幸枝の演じている朗読舞は、大橋さんのサインダンスとはまた違う側面・方向で聴覚障害の人達と健聴者が一緒になって作り上げる芸術表現になるであろうと思う。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治)

<http://www.furusato-kaze.com/>

## ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会もこの6月からは7年目に入りました。

ふるさと風の会では、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間」を募集しております。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさと自慢をしたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費) 入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063

打田 昇三 0299-22-4400

兼平ちえこ 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659

「ふるさと風の会」 <http://www.furusato-kaze.com/>

石岡市柴間ギター文化館発「ことば座」第23回定期公演

「常世の国の恋物語百」第30話

さくら  
**平将門伝説 苺萱姫物語**

2012年6月15日～17日（14時30分会場 15時開演）

ホルストが伊藤道郎のために作曲した「日本組曲」を主題として、太古には日高見国と呼ばれていた常陸国信太郡に伝わる伝承物語を軸に、常世の国の恋物語として、手話舞の小林幸枝とモダンダンスの柏木久美子の共演によるコンテンポラリー舞踏劇として構築。

平将門の亡霊の告白にきく承平の乱の真実と苺萱姫への思い、そしてまだ見ぬわが子への願いを小林幸枝が手話の舞いに舞う。

苺萱姫の将門を慕い思ふ女の心と将門の果たし得なかった思いを子守唄の中に託して子に伝える母の心をモダンダンスの柏木久美子が、朧なる湖上の月に思いの映して、宵の花に酔うて舞い思ふ。今回柏木久美子は、山本光のピアノ演奏に乗って苺萱姫の魂の声を舞います

脚本：演出 白井 啓治

舞台背景画 兼平ちえこ

舞台装美 小林 一男

（出演）

朗読：しらみひろち

舞技：小林 幸枝 柏木久美子

音楽：山本 光（ピアノ）

○柏木久美子が伊藤道郎を偲んで、ミチオナンバー（山田耕筰作曲、音の流れ1・2）を山本光のピアノでギター文化館の円形ホールに再現します。御期待下さい!!

○山本光のピアノ・ミニコンサート（英雄ポロネーズ/陸平ラプソディー）

入場料…3,000円（小中学生1,500円 ギター文化館 0299-46-2457 で取扱っております）

**ことば座**

〒315-0013 茨城県石岡市府中 5-1-35 Tel0299-24-2063 fax0299-23-0150